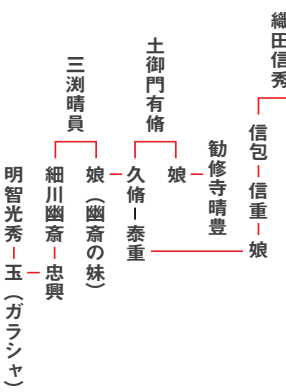
暦の全国統一もついえた本能寺の変

～織田信長と明智光秀と土御門家～

陰陽師安倍晴明の末裔、土御門家。土御門家は応仁の乱を避けて領地である名田庄納田終に移住し、有宣・有春・有脩の三代にわたり居住しました。実は、この有脩の子、久脩と久脩の嫡子、泰重は、織田信長や明智光秀と縁戚関係にありました。泰重の妻は信長の甥の娘であり、久脩の妻（泰重の母）は光秀の娘の舅である細川幽斎の妹だったのです。さらには、本能寺の変が起こる直前に土御門家と信長は関わりを持っていたのです。

土御門家は、室町時代後期に名田庄（現在の大飯郡おおい町）で暦の製作や天体観測に携わっていました。戦国時代の暦は京暦が広く使用されていましたが、東国では三島暦が使用されるなど複数の暦が使われ混乱していました。尾張の暦師が三島暦を使用するよう信長に要望したので天正10（1582）年1月29日、安土城において信長立会いのもと久脩らと尾張の暦師との間で京暦と三島暦のどちらが正しいか論争が行われます。しかし、結論は出ませんでした。信長は2月にも久脩らに再検討を命じ、京暦が正しいとの結論を得て信長に報告します。二つの暦は閏月の取扱いに違いがあり、三島暦では天正10年12月の後に閏12月を入れるのに対し、京暦では翌天正11年1月の後に閏1月を入れていました。閏月をどこに入れるかで正月が1か月ずれることになり、これは人々の生活に大きな影響を及ぼす問題だったのです。

土御門家姻戚関係系図



天正10年6日1日、信長は本能寺において、関白、近衛前久や久脩らと歓談し、閏月を当年に入れるよう（三島暦を採用するよう）申し入れます。同席していた勧修寺晴豊は日記の中で、「これ信長、無理なることなり」と困惑しています。年も半ばを過ぎ、今さら当年に閏月を入れることは無理なことだったのです。暦についての信長の考えは記録に残っていませんが、暦に関心を寄せていたことは間違いなく、全国を統一し暦も統一しようとしていたのかもしれません。しかし、翌未明、本能寺の変が起こり、信長の全国統一の夢はついえます。久脩はその直前に本能寺に滞在し、信長と時をともにした人物だったのです。

慶長5（1600）年、久脩と泰重は徳川家康の命により京都に戻ります。その後、寛永2（1625）年7月、泰重は名田庄に里帰りし、京都への帰途には幼少期に過ごしたことのある丹後国田辺（現在の京都府舞鶴市）を訪れています。泰重の妻の親戚である信長を討ったのは、母の親戚である光秀。母の実家があった丹後国を訪れた泰重は心中複雑な気持であったことでしょう。

関連史料・ゆかりの地

土御門家墓所

おおい町暦会館

おおい町名田庄納田終地区には、おおい町暦会館があり、土御門家ゆかりの資料や各地の暦を展示しています。近くには土御門家三代にわたる墓所の他、加茂神社、陰陽道の祭祀場である天壇などがあります。

【住所】 おおい町暦会館：大飯郡おおい町名田庄納田終111－7
（JR小浜駅より大和交通流星バスで「ホテル流星館」下車徒歩1分）

参考資料等
吉田兼見『兼見卿記（史料纂集 古記録編）』八木書店、勧修寺晴豊『晴豊記』『続史料大成　第９巻』 臨川書店
岩沢愿彦「本能寺の変拾遺―『日々記』所収『天正十年夏記』について―」藤木久志編『織田政権の研究』 吉川弘文館
土御門泰重『泰重卿記』 続群書類従完成会

執筆・協力　おおい町暦会館

発行／福井県観光営業部ブランド営業課